



POETRY
PAPER

第 10 号記念号

2016.7.21

今川 洋……02
ぼうずみ愛……06
保坂 英世……11
山形 一至……17
吉田 慶子……23

【招待席】

矢代 レイ……28
鈴木いくこ……29

しりとり詩……30

湊詩人クラブ

今川 洋

骨の信念

父も母も 炎熱の浄火をくぐり抜け
美しい骨格となつて出現
骨格の沈黙は悟りの境地かと

空は碧い 大地は緑 天と地を結ぶ骨が
その信念をささやき合っている
闇の中で パズルのように組み合つて
未明には詩の骨格にもなつて
深閑として人の胸にしるのびよる

水・ず・く・屍
草・む・す・屍

骨格の信念は こうして思想を伝えようと
戦いの日々 位牌のはいつた杉の木箱は
カタコトと音がした

小さな木片に書かれている戦死者の名まえ
地震津波で異界へ移住を強いられた人々よ
沈黙の怒りを誰に告げようか

抱きしめたい骨の信念を

《自身^えの心を吐露して詩う ぼうずみ愛》

「骨の信念」を詩に描く今川洋さんは、両親が遺した最深の芸術は、信仰の念にありその生ざまを子孫に伝えることこそ至高の美にあるのだろう。

骨は死者のすべてを凝縮した魂であると仏教真理をさぐる道は深まつていく、両親はあの世でパズルのように組み合い夜の明け方にはそつと詩のからだつきになりひっそりと、人の胸に入ってくるという。

その様相を考えると、それは解脱を得てさとの霊のかたちであろうか。その姿勢は慈悲心と平靜さと何よりも心奥にひそむ情熱が詩情をかきたて多くの人々を感動させる魅力は天性のものだろうか。

早朝の秋

早朝の秋の青い大空

ふた筋の白い雲が 帯状に並び

暁の光が 澄んでいる その清らかさ

七階の病室

大きな窓 風景が爽やかで

慈愛の 瞳が湧いてくるようだ

こんなにゆったりと眺められるなんて

贅沢な時を持てるなんて

忘れていた真実がようやく

この胸にあらわれる

仰ぎ見ているつもりが 実は見られていた

つがいの鳥が窓を横切った 七階なのに

追いかけてつこを楽しんで 光る心

きょうも娘が とびきりの笑顔で訪れる
それを期待しつつ 大空の青さにひたる

《感想・山形一至》

ひとは朝目覚めて生きかえる。新しいいのちの羽ばたきで一日が始まる。病室の窓から眺める風景も、新鮮に感じるのは心のゆとりを取り戻したときだろう。

作者は齢を重ねても、清らかさを失わない、秋の日の澄んだ空のように純粹だ。内なる視界は鮮明で、人生を達観しているから自己と戯れる余裕さえ持ち合わせ表現できるのだろう。永劫回帰の思想に裏打ちされるものを、胸に抱いているからだ。心の位相を的確に捉えており、日常の領域から飛び出そうとする勢いがある。

作者の瞬発力で病から抜け出してくれることだろう。

名月

茶柱が立ち きようは佳き日と

笑顔の若人達 うす緑色の愛のように

名月の空へゆったりとただよう茶の香り

あすは 吾身も大空へ

今宵の名月に旬の味も捧げる

栗の季節 豆の季節 薯の季節等々

特攻の若人達よ 毅然とした姿よ

知覧にその風習があったかどうか

勝手に推察している七十年前の事を

あの熾烈な戦争にむかさせたのは誰？

知覧はお茶の名産地 特攻隊員は茶を啜る

知覧地を啜る 故郷を啜る その思いよ

片道燃料で飛び立って

名月の夜ならば 月世界に消えて欲しいと

現代では 茶柱なんぞ問題外

誰が持って来たのか

「知覧」の太文字の茶の袋

《感想 保坂英世》

秋田ではあまり知られていないが、透き通った若緑色とさわやかな香りの知覧茶。この地は上級茶の産地として名高い。

そして薩南の涯、山の中の静かなこの町は特攻隊の若者が青春の幾日かを過ごした町でもある。250キロの爆弾を抱えた特攻機がよろけながら飛び去っていった町。雄々しく大空に散華された隊員のさまざまな思いがこめられている町である。

作者は知覧のお茶を飲みながら思いを馳せる。静かにお茶を啜っている若人達の姿には、月の光がふさわしい。煌々と輝く満月に何を見たのだろうか。

みどりのシンフォニー

分け入っても 分け入ってもみどり*

みどりの重なり 広葉樹の輝き

あなたの わたしの心に響いているみどり
林みどりさんは わたしの友

清々しい姿で あたりを温かくする彩どり

大詩人畠山義郎氏の鴉は黒い 黒い

白い鴉が栖んでいると 大陸の森は
うそぶいていた

オ、ホンみどり鴉がいても不思議ではない
と 誰かが笑いながらうそぶいている

分け入って分け入って

みどり濃い山を歩いている 北欧の杜
大詩人が名称の美しいところ

往年の詩碑がみどりにひかり

北の空 風もみどりよ

仰ぎ見る人を包みこむとき

みどりのシンフォニー 祈りのひととき

*山頭火から拝借

《北の大詩人に捧げる交響の詩 ぼうずみ愛》

万緑のなかを旅する今川さんは漂泊の詩人、山頭火を意中の旅立ちだったと思う。彼女は老を感じさせないはやぎと哀愁をにじませた女流詩人である。空はブルー森はグリーン渾然一体のなかに友とひとつに溶け合っていた。鴉が声もなく飛んでいる、が啼かない鴉は畠山義郎の内省の鴉であって絶対の黒である。黒と表現するのは作者自身の内観であり鴉に於てブラック思潮の考えと思う。白い鴉、みどり鴉は背景に依り表現されるものと考ええる。

目ざす旅は「北欧の杜」であった。情緒ゆたかな今川さんは往年の「詩碑」前にたたずみ今や異界に旅立った北の大詩人畠山義郎に「心の花束」交響の詩を手向けるのであった。

ぼうずみ愛

今昔の賦

元油田の陋屋ろうおくに仮寓し
ひたすら詩音をたぐる

時代ときは昭和初期

姉（わたし）が五歳でおとうと三つ
村に飢饉の風がふきざらし

柿もぐど柿もぐど カネやんのふれる声
つぎはぎだらけのわらしだがはしつていく

里山のきわに柿の木
そのおくは栗ばやし

父がけかつにそなえて植えた実のなる木

カネやんが鉤にからめたりゆすつたり
おち敷かれた柿むしろ
わらしの歓声に山びこが呼応し

姉の手籠に青柿三つ

あえかな影絵のおとうとよ

今、古四王の森に佇ち来し方の音を聴く

〈二〇二二、四月〉

《今昔の賦 山形一至》

幼少時代を回顧しての作品で、自己意識を表出し
たところに特徴があります。

父の知恵は「けかつ」に備えて植えた柿の木。「け
かつ」は飢渴（きかつ）ともいう。柿をもぎ落とす
時の音は、確かに聞こえてくるのです。詩に季語が
あるものは、鮮明な想念にもつながるようです。「あ
えか」は、かよわい、たよらないさまで、おとうと

を影絵のように今も思い出すのです。

ただ、叙景のなかに描く形が大切で、構成を更に整えると、人心を動かす力につながるのではないのでしょうか。作品は作者の履歴書の一部になるとしてもよいようです。

彼岸花

夕方まで座っているときがあった
手箱におさまった小指の爪ほどの母の骨
亡父の形代と共にせまい空間におさまり
とまどいながらはにかみ笑っていた

母が逝く朝、どこからか子雀が入ってきて
ベッドの下でかるいリズムが弾んでいた
私は母の耳もとに口を寄せ、きこえますか
と訊くが母はもう十萬億土の旅仕度

あの丁度ひと月前ふるさとに不義理を詫び

母とその家族の住む家で篤い持成もてなに酔い

来年の逢会あひまをきめてきたばかりであった

母が逝って庭のあちこちに彼岸花が咲いた

あの日から百日目の花は

死者の足もとに燃えて咲き

水をやって 香にきくと

鳥たちが賑やかに囀っていた

〈二〇二二 十月〉

《母への想い 吉田慶子》

彼岸花は死者と深く結びつけて語られることが多い。葉も無く、はじけたように燃える朱の花だけが群生する様は、極楽のようでもあり地獄のようでもあるからだろうか。その上、彼岸のあたりに咲くのだから。

作者母娘が最後に語り合った庭に彼岸花が咲いたという。花は、娘である作者への心残りの化身であるかのように受けとめられ、その花を見る度に亡母への想いのつもののが、よく伝わって来る。

母の遺した物を、父の形代と共に手箱に納めて身近に置く作者の心情の深さに心うたれる思いがする。

回想

はるかに杳とほい日

病院のかえり

バス路線をまちがえ

降りたところが吹きざれの原野

海から吹きくる疾風

八郎潟干拓の音が身をしぶく

からだを折り曲げ うずくまる女ひと

白い仄かな闇のあなたのかかりに

けんめいに手をふる女の前に車は止った

ふたりの男*がおりてきて

女をすくいあげ

あきた駅前食堂

ザッパ汁で女は生きかえった

男たちは龍ヶ島写生のかえり

生きのいい雪女をひろってきた

と わらい話に花を咲かした

あれから櫛風しづふう沐雨もくうの三十余年

雪女の宿痾しゆくかうをいたわる男と

龍を描く男のまつごを看ひととつた女

天上におわす マスコットよ

雪女は ゆきおんなのまま

かすかな待春の登音を…

*うめづさんを家老と、むらかみさんを奉行と呼び

合っていた

(二〇一四、十二月)

画家が遺した言葉愛

画家の彼は桜吹雪の夜よに逝きました

死の影があらわれ

腹水のたまった体で浴室に入ったとき

〈流なしましょうか〉と声をかけ開けると

えがら 閉めろ さびがら

君にこんな不様な恰好見せるなんてー

このかたくなな言葉に傷つき

おんねんにおちていく私でした

死を意識しはじめた時でしようか

センソウでオレはヒトをコロシ

オレの死体を空に吊るした十八歳の…

そして終末を迎えた死の床で

〈アイシテル〉と言葉にならない言葉

白い目にかたarse逝きました

《感想 山形一至》

「うづくまる女」は作者自身である。女を救ったのは二人の男性だが、奉行と呼ばれていた村上画伯との縁が生まれた。「生きのいい雪女」とは、面白い比喩。苦節30年と言わず、「櫛風沐雨」と言うのだからかなり苦労されたことが伺える。この表現は、今では余り使われないが、菊池寛の『仇討ち三態』にある。「三十年間の櫛風沐雨で…」という一文。回想として書き上げたが、作者は画伯の侍風の面影を抱きながら心に永久保存する考えなのだ。肉声が絶え、残された絵画も静寂に包まれているが、作者には、そこから生活を共にした息遣いが感じられるに違いない。待春は作者にとって永遠の季語として生きている。

戦後、七〇年目の特攻祭で

ハーモニカを吹く老人が

へきさまとおれとは同期のさくら

(咲いた花なら 散るのはかくこ)

彼は わたしのふところのなかで
わなわなふるえ桜のまつごを歌っていた

〈二〇一五、六月〉

父と娘

矛盾の美をも芸術に昇華させたに違いない。じわり
じわりと恋の波濤が、わたしの心の水際に押し寄せ、
その妖しい青光りで目が眩む。
画伯は、雪片のように落ちてくる花びらに魂を込
め、作者に詩を語らせる。

さくら満開の昼さがり

千秋公園一画に

「あやめ団子」と呼ばれた所を尋ねていく

茶屋は空家になり

枯渴の池にカキツバタか一八か

はるかに杳い紫雲の影がただよう

ベンチに腰をかけ 目を瞑る

あやめ茶屋から手をつないだ親娘の光景

《感想 矢代レイ》

いま作者は、感情も肉体も弱っている。作者の虚
ろな瞳には、生きることの根幹になっていた画伯と
の最上の思い出しか映っていないのではないだろう
か、火の色とかたちをもつて――。

画伯は逝ってなお、〈アイシテル〉、と作者に言わ
しめた。赤い恋の実は、作者自身の寸法でしかも
のを考えられなくさせた。常識の壁を越えた二人は、

昭和初期の公園広場

保坂英世

時局演説を聞く父と娘^{むすめ}

壇上から「もうじき戦争になる」の声

ザワザワとはしる戦慄

風が千秋の杜を突走った

椅子

あちこち 家具店をまわり

やっと見つけた

新築のとき あつらえた椅子

郡衆の中に子を背負った女人の姿が

幼い目に美しい絵となって焼きついた

父がおしえた労働と祈り

山間の村にはためいていた

〈二〇二六 五月〉

食堂のテーブルに五脚

南向きの出窓

光を浴びて

高級品ではないけれど

そんなに安くもなく

かつてあったという中流大國日本の象徴

*父はその年の夏の終わりに他界し娘の私は五歳であつた

娘が ひとり 嫁ぎ

母が 逝き

座る場所も変わった

布地を張り替えたなら

ずいぶんと立派になって

それでもノートパソコンとバッグが置かれている椅

子

「娘たちがいなくなるとさびしいだろうね」

かわいいさかりに 交わした言葉

現実味はなかったけれど覚悟したあるとき

三人は静かにカレーライスを食べる

日々は平凡に平穩に過ぎてゆく

それは嫁がずにいる娘がくれた余録

椅子に座る人は

いつか ふたりになり

いつか ひとりになるのだろう

新聞では少子高齢化だと騒ぐが

フンとあざ笑う

腰の折れ曲がった島に腰かけているというのに

《椅子は口ほどに物を言い 吉田慶子》

他家の建築仕様を見上げることはあっても家具にまで目を向けることは、まずない。まして椅子などは勧められて腰を下ろす程度で話題にもほらない。

それが自家の家具となれば思い入れは一変し、家の新築という男一代の大仕事の際に購入した椅子は、もはや作者にとつてただの椅子ではない。

家族の動静を見つめ、日本の隆衰までも心する椅子は作者そのものであり、カレーライスの平穩ないい匂いさえして来る。作者の選り取った生活がそこに腰かけている。

終連の「高齢化」をあざわらう風刺が小気味よくひびく。

ミズクラゲ

人々の思いや感情は

雨に流れ 川となり 海に沈んだ

思いは いつか

白いプランクトンとなってゆらめき

また 森のごとく海藻を繁らせた

ヤスクニ、歴史観、領土

軋みあう 言葉

宗教、自爆、内戦、貧困、独裁

求めるものと かけ離れていく正義

うす明るい海

半透明の傘を広げて ゆらり ゆらり

ミズクラゲの拍動は妙に心地よいリズムだ

恋する海

潮目に集まるおびただしいクラゲの群れは

単に流されているだけでもないらしい

クラゲは怨念を喰らう 海は蘇る

そして その体を海の底に沈ませた

6億年もの間続くクラゲの言葉を知らない

《海に問え ぼうずみ愛》

主題のミズクラゲを分類するとミズは真水クラゲは
〈水母〉と分かった

作者は海に浮かぶ水母の擬人法により現代社会にひ
ろがる闇を抉り詩人の姿勢を明らかに、問題をる
提示した上で真向うから批判し抵抗の精神がありあ
りと見えてくる

水母に思いを寄せれば 出生は海

世の潮目に揉まれて怨念の亡者となり

海底に沈み うす目を開け見あげると

恋しい海が：

この作品に込められた批評や不条理は読者を喚起し
溜飲を下げたことと思う

心の痛み 消えない傷 ゆらりゆらりと海を漂うク

ラゲの言葉は……。会心の作

（二〇一四 二月）

秒

1秒

心臓が一回 脈を打つくらい
なんと短い時間だろう

セシウム133原子の基底状態の
2つの超微細準間の
遷移に対応する電磁波の
9 192 631 770周期
に相当する時間

1秒ではなんにもできないと思っていたが
初めて逢ったひと
視線が変わる 電流が走る
瞳の奥に駆け込んでしまった

ビッグバンに始まる

気の遠くなるような時を経た宇宙

それでも1秒の間に

79個の星が その生涯を終え

太陽系が 銀河を220 km 進み

地球は 太陽のまわりを29.8 km 進む

海底を流れる深層海流が 10 cm 動き

………どうか心が動いてほしい

ハワイが2.9ナノメートル日本に近づき

………少しの時でも側にいたい

グリーンランドの氷河が1620 m³溶ける

………うちとけた会話がしたい

世界中のニワトリが3万3千個の卵を産む

………

*データは「一秒の世界」から引用

《数字の楽しさ》 吉田慶子

一秒という時間をテーマにした学術的な詩。それでは私もと、苦手な計算力を総動員して一時間は？一日は？と、九九と筆算で頑張ってみたところ、一年は31536000秒と出た。私はその72倍もの秒時間を呼吸し続け、怒ったり喜んだり沈み込んだりしていることになる。

数字の簡潔さ（時には冷酷さ）は詩材として不向きだと考えていたのは私の大間違いで、宇宙のロマンと自然界の不思議、視線の交わりの微妙さまでも語れるんだと認識させられた一篇である。

最終連に組み込まれた作者の息づかいのなんと若々しく、なんと熱いこと。……

雷鳴

——ゴルフ場のカート置き場で——

（今日降るかな）

六月の憂い

風は

刈られた草の生々しい匂いを運んでくる
遠くにある木々は煙る
緑は溶けていく

外階段を降りる

数羽の雀は庇から飛び去っていく

薄情な距離感

カート置き場には例年いっものように巣を作った

燕が低く飛び交う

無防備なほどの距離感

クロツカスのような雛の口

だれかの心遣い

透明なビニール傘が

逆向きに吊るされている

小さく

雷鳴 ひとつ

《「雷鳴」を読んで 鈴木いくこ》

「雷鳴」というタイトルがすぐくドラマチックだな
と思いました。今は降っていないけれどもこれから
確実にやってくるのがわかっているから、前ぶれの
光と音に気構えているしかないからです。

雷鳴が響くとその厚い雲の下でじつと時を過ごす
しかないけれど、思いがけず発見した燕のかわいさ
や傘の優しさもそのおかげだったりして。

情景が映画のワンシーンのように浮かんでしまし
た。雨に煙る写真などがあれば詩とコラボもいいか
もと思いました。

情景を書いているだけのようでいて、心情をかい
ているような気もするし、距離感…も人との距離感
の比例のような…。

岩千鳥

桜が終ねると

木々の芽はふくらみ やわらかな緑に染まる

穏やかな物言いから吐かれる辛辣な言葉

五月の日差しはそんな感じで降り注ぐ

言葉に少し驚いたように

花々は次々と庭に咲き乱れる

おずおずと 片隅の鉢にも

小さな鳥のかたちをした うす紅の花

(これいいね)

カタログで見つけた岩千鳥

サカタのタネから届いた郵便は 小さな苗が数本

鉢に植えたら保育器の中の未熟児にそっくりで

いつも帰りが遅いから

アザラシの父親のようにほったらかし

育てるのはいつものとおり母の役目

あれから何十年たったのだらう

どれだけの株が巣立っていったのだらう

友達や職場の人々へ

感嘆の言葉をおみやげにいただき

よその家でも増殖する岩千鳥

ほんの少し しあわせ気分のお裾分けです



山形一至

バスターミナル

秋田駅前からのバスは

およそ30路線あるという

年々乗降客は減るばかりで

かつての賑わいはない

高齢者は百円バスに乗れて喜んでいても

経営は厳しいようだ

新装の乗り場は 木の香り

田舎の空気を 少しは感じるが

寒いときは 寒い

バスがくるまで

普段でも揺れそうな身体は

箱の中に乗って さらに揺れる

街は粧いの裏側で 収縮をくりかえす

泣き叫んでいるようなネオンのあかり
見ないふりをして 見ている風景
歪んだまま包み込んでしまった風景がある

あのとときも

君の影をひそかに追いかけていたのだった

《ターミナルの不思議 吉田慶子》

バスに限らず空であれ地下であれ、ターミナルは
種々の空気と顔を持っている。出会いと別れ、思い
出と希望、あるいは愛と憎しみまでも含んでいるか
も知れない。

新しい秋田杉の香りに包まれながらも寒風にさら
されてバスを待つ作者の胸中に去来するいくつもの
風景が、劇場のステージのようになまなましく動い
て見せてくれる。

音響や照明までもその時代そのままに蘇って感じ
られるから不思議である。

あの時の君の影を未だに追っている作者は青いの

か枯れているのか、ロマンを背負った男なのか。枯
葉色に近づく程に君の影は鮮明になっていくのかも
知れないと思う。
私もそうだから。

落果

押し寄せてくる変化波

熱い潮は遠くへ去り

冷たく低く うなりをたてる空

日本という国 騒がしい

いま 一億二七〇〇万人

四十年もたてば八七〇〇万人になるとい

それでいいのだろうか

未来は永遠か

むかし 火種を抱えている女に

興味をもった

いまでは ふたりの関係も

失速して果てている

求めようともせず

失いながら 女を見失ってしまった

曼珠沙華よ

思考減退から 思考停止

やがては 無思考無自覚

ああ おそろしいこと

もうこの世でないといったら

あの世になる

だから彼女も あの女^{ひと}である

もとの姿形など どこにも見当たらない

《落果考 ぼうずみ愛》

落果は、人類滅亡の危機を視野に人口問題を危惧し、いま国は自然災害がうしおの如く起きています。宰相

はこの日本国をどこにもっていかうとしているのか、未来はあるのか、と批評精神がありありと読みとることが出来る。

昔の女は静けさをよそおいながらも内面は激しく燃える烈女がいた、現代はどうだと淋しさをかくし得ない（火種を抱えている女に）愛も恋も失速した原因は何故だろうか、自然破壊による身心の疲労は恐ろしいと自己の内面を覗き見るのである。

ああ（無思考無自覚）恐ろしいことだ、とアイロニーのことばで締括りをつけた落果に共感し扱^さるところから立上^たがらなければ――。

〈二〇一四、九月〉

悪口

雑談に加わることは 最初楽しかった

だが いつの間にかひとの悪口が主流になっていた

私は いやだなと思った

加わらない方が自分のためによいと思った

私が付き合わなくなったら

悪口も聞くことがなくなった

どこか すつきりするものがあつた

だけど 私の悪口を話しているのでは

と気にかかつてきた

これまでの悪口を 頭の中で整理してみると

まんざら悪口ばかりではないように思えた

人物批評としての正論もあつたのだ

ひとつとかわかることは難しい

社会とかかわることも難しい

ふたたび加わってみると 童話のような夢が

ていた

黒いコート来たひとたちが

いつの間にか 白いコートに変わっていた

語られ

《悪口がメルヘンへ 今川洋》

自分の事はタナにあげて人様の事を色々と悪く

言っている……とはむかしからよく言われていた。

悪口をモチーフにしての詩作品は重く暗くなりそう
だ。

しかし山形詩は、自分の心の推移から、すくいあ

げて、逆転の発想で、メルヘンへと着地した。終連ユー

モアをともなつて暗示的である。つまり悪口を基点

とし、心情の起伏をともないながら、黒が白に変化
する童話の世界へと読み手を誘うおもしろさがある。

女の川

女の川は いつも清流とは限らない

よどみを畏れて 男を遠ざけるときもある

地図を掀げると

幾本もの川が 細い光を伴って流れている

この川は不条理な身体に
女の情念を仕込んで
激しさを増すことがある

男は女の川をせき止めることはできない
流れに身をまかせて

女の川は緩やかに流れる

このとき 女はどこへたどり着くのだろう

一漕の舟に 男たちの記憶を乗せ
隠喩と手を組んで

流れ着くのは 古里の海

山と野と川が一体となって

痛みを分けあっている

女はこの川の水を せつせと汲む

仮面の男へ 潤いを残すために

ペールを被ったままで

女の川は涸れることはない

《「女の川」に寄せて ぼうずみ愛》

山形さんは詩作品のモチーフによく「女性の感性」について取上げられるが、この「女の川」は女性の歌手が歌い上げるかと思わせる「濃度の彩り」を各行から放たれていると感じさせられる哀切の詩だろうか。「女の情念を仕込んで―」との激しさ、「一漕の舟に 男たちの記憶を乗せ 隠喩と手を組んで 流れ着くのは 古里の海」との表現に山形さんの情感が込められていると感じた。そして「女の川は涸れない」とあるが果して涸れないだろうか。涸れたり、さざなみだったりして「繰り返すのが人生」だと考えるのだが。この「女の川」は山形さんの悟性によって作られた詩、と読んだ。

視線に遊ぶ

この町に暮らすひとびとの視線は

どこが山に浮いているような気がして
虚しかった

そのなかで丸くなったり 三角になったり
感情が 揺れ動いている視線があった

その人はそんな町に住んでいたが
いつも優しい視線を向けで

あまり自身をむきだしにしなかった
二人の視線がぶつかるときがあった

空間には遊ぶような空気が漂う
信号が合図するように

柔らかな陽光が降り注ぐ
心の遊びに 胸が高鳴った

人は力を抜いたとき 安らいだ表情になる
視線の焦点も緩む

その人の険しい視線や
悲しい表情を私は知らないが
時間を引きつれた 物語りがあった

その夜 枚線の先の方で果肉が一つ落ちた
恥じらいの視線があった



吉田慶子

年越しの大鍋

大鍋の中は大騒ぎのカーニバル
牛蒡 人參 芋の子 大根 茸たちが
蒟蒻 油揚げと腕を組んで踊る 踊り狂う
逆立ちや宙返りまで見せて
ついにぐったりと柔かくなる
そこへ ありったけねばねばして
ありったけ臭いの強い「納豆汁の素」が
味噌と絡んで 踊りの騒ぎを盛り返す

根菜や茸のダシと納豆味が
ルンバやジルバのリズムをやたらに踏み
めちゃくちやに溶け合って
おいしいおいしい納豆汁となる

お椀に盛られる直前に
細かく切った葱と豆腐を振りかける
何度も温め直しては 湯気を吹いて啜る
年末年始の
多忙な炊事係にとつてのありがたい味方
おお 納豆汁様よ 踊れ 年を忘れて踊れ

《保坂英世》

ごらんのように楽しい詩。こむずかしい解説や感想は不要としたものでしょう。みなさんも存分に踊りまくってください。

納豆汁は中学校の頃食べたような記憶がある。具材は豆腐と葱だけだったような気がする。こんなに豪華ではない。私は秋田市に住んできたので、ここ何十年と食していない献立だ。納豆汁は県南が中心とされているので家内に聞いてみたら、やはり年末年始に食べたという。茸はサワモダシだそう。インターネットをのぞいたら、どうも秋田、山形、岩手を中心のよう。具材も所様々。レシピを見たら

五十七万件もあってびっくり。

カモミールの香り

一分計の砂時計を添えて
漉し器付きの カモミール・ティーを
静かに わたしの前に置いてくれる

雪の日のカフェの

若くて 細身のウェーター

ピンクに染められた砂粒が

たちまちのうちに落ち尽くし

カモミールの小花が 琥珀色に香る頃には

さっきの若者は もう 居ない

時間制なのだろう

一日に何か所も職場をかけ持っているらしい

このごろの若者たちの働きかただ

「転職をくり返す者は 信用できない」とは

ひと昔もふた昔も前の 大人たちの言い分だ

若者に代わった白いカフェエプロンの女性が

お盆を持って テーブルを回っている

カモミールの 熱い香り

《香りたつ風景 保坂英世》

それは短いけれど、ほっと一息つける癒しの時間。

時のうつろいの中にくりひろげられる色彩感が心地よい。

だから若者を見る目もあたたかくなるのだろう。

最近の若者とは、大人たちはずいと言ってしまいが、

それは老化の証拠でもある。たしかに訳の分からぬ
人種もいることはいるが、大部分は素直でやさしい。

2 連目は短いですが、読者にたくさんの想像を与えて
くれる。作者の見た若いウェーターは、自分の子供

と重なるのだろうか、それとも若いときの彼に見えたのだろうか。

時の流れと、香りと、色と、光さえも感じられ、万華鏡のような作品に仕上がっている。

墓のモノガタリ

実りなかばの黄をおびた田と

細いむら道を見下ろす 集落の墓地に

祖父も祖母も その父もその母も

かすかに それと分かる土盛りとなり

盆の参りを静かに待つ

花を供えるにも 線香を焚くにも

おり重なる土のふくらみをよけながら

右に左につま先立って巡る

うすい卒塔婆は朽ち倒れ

眠る人とのつながりは
年寄りの記憶に頼るしかない

孫わらしの時だば あまり痛ましくて
じさまを抱かれるように埋めながら
ここと ここだったべおん

おやがだまん中にして
先の妻が右で 左が後妻であつたな

今年の盆は雨前線と出会ってしまい
雨粒になったり 濃い霧が降りたりする
こんな夜には
土のふくらみが おおきな音をたてて
落ちることも あると いう

《感想・山形一至》

素材をつかむのも、着想にある。発見があつて詩

も生きる。

祖霊とどのようにつきあうか、その家のしきたりもあるようで、お盆の季節を捉えての作品。地方によって異なるが、昭和の初期までは土葬が多かったようである。埋葬文化として永く続いてきた。作者は、墓の歴史に思いを馳せながら、淡々と書きしるした。雨脚が強くなると、先祖が眠る盛り上げた土が崩れる、その変化を見逃さない。思考の埋蔵量が、作者にはもつとありそうだ。詩は情感の源を探る作業だから。満は、やがて朽ちる、人生の悲哀も埋められている。

終わりの始まり

暑い午後 うとうとの時間
ひまわりのタネが 散り落ちる
ひとつずつ 確実に散る
縞模様を浮き立たせ
充分に腰を張ったタネが

コロッ ポトンと

地上でバウンドするほどに 活きがいい

よれよれにすがれた大輪の花は
終わったのではない

タネの始まりを生み出すための
偉大な終わりであった

午後の うとうとの時間はまだ続く

コロッ ポトンと散るタネの始まりも
まだまだ続きそう

《着想の面白さ 山形一至》

着想が面白い。作者は滅びへの感動を詠いながら、終わりのないのちの価値を見つめている。自然界の摂理のなかで、種子は耐え抜くことを知っている。暑い昼下がりに、「うとうと時間」のなかで体感するのだから、作者の余裕と才知を感じる。

ことばを笑いに

四十代女性のFさんから
笑える言い回しがこぼれ出る

南米のアンゼルチンでねえ

アルゼンチンですね。アンデルセンともちが
うよ。

アスパラを探検するんだってよ。

冷寒地のアラスカですね。アスパラはゆでて
食べてください。

あ、この曲「モンゴルは飛んで行く。」

いえいえ、モンゴルは相撲の国。飛ぶのはコ
ンドルでしょ。

Fさんと話していると

ことばを転がして笑って遊べる

フィギアアの荒川選手が

上体を反らす演技を見て

わあ、すごい。バイアグラだ。

いえいえ、決して怪しいクスリではありません
ん。イナバウアーですよ。

いつの間にか 花も終わり若葉の時となる

近く Fさんがお嫁に行くという



【招待席】

あなたを思い出すとき

矢代
レイ

(痛い)

あなたはそう言った

十月

ゆたかに咲きにおう薔薇をまのあたりに
あなたは手をさしだした

(イタイ)

針の痛さを感じた
白い皮膚の内部からにじみでる
一しずくの憂い

傷口は悲劇への入口であった
棘の恐怖に あなたは嘆きながら打ち沈む
やがてサナトリウムに
蒼ざめたあなたの姿が……

時の茂みにわたしが迷ったとき
ビロードの花弁の内部から流れでる
ひらかれたあなたの言葉をきく
あふれる感受の薔薇……

わたしはあなたとともに
言葉を旅する

《感想 吉田慶子》

薔薇の棘の痛さは、あなたと作者を結ぶ見えない糸のようなもの。しかもその糸には長い空洞の通路があつて、痛さばかりでなく憂いや言葉の髄液やら感受やらが自由に流れ通している。

蒼ざめてしまったあなたの姿にも薔薇はなお咲き
におい、その薔薇にも増してゆたかな言葉の林を旅
する作者の足どりが迷いを超えていよいよ確かに踏
み進んで行かれるだろうことが予感される。
「ひらかれたあなたの言葉」は作者の耳に心地良く、
これからの旅マップとなってくれらるる。と信じられ
る。

コーヒーを飲む

鈴木いく子

一日に何杯も飲むコーヒー
大抵はインスタント
気休めに色をつけただけの飲み物だが
たまには珈琲専門店の扉を開く

香り豊かなコク、満足感と充実感

または雑味のないクリアな感慨に
出会えたらラッキーだ

最初はブラック 密度の濃い苦み
次に砂糖を入れる 徐々に溶ける甘味
次にクリームをいれ最後にかき混ぜる

若いころは自分で豆を挽いて
サイフォン、ドリップ、マキネッタ
今ではすっかりインスタント
お湯を注ぐだけでとっても簡単

コーヒーを飲むという行為に
期待するものがある
リラックスと希望と・
そして原稿を書くときは
その横にはコーヒーがある

《感想 山形一至》

コーヒーを飲む香気の中に自分史の一端があるようだ。苦味や甘味が混ざりあって人生がある。コーヒーを横においてゆるやかに流れる空気の中で、原稿が書けるとしたら幸せである。

若いころの作者はコーヒー通で、自ら豆を挽き、マキネッタなどで入れたモカ・コーヒーを楽しんだのだろう。

主婦業になじむにつれ、インスタントで満足し、そこでも心の余裕を取り戻している。時には専門店で過ごすのもよいが、希望を失わず、リラククスして精神をほぐしている作者の姿が浮かんできて好感がもてる。

しりとり詩

しりとり詩の試み

吉田 慶子

「詩・あそび」で自由に楽しく遊んで七号目を迎えました。湊詩人クラブ四人の平均年齢も喜寿を越えそうになり、同じことの繰り返しでは居眠りが出そうになりました。

この小詩集を知人友人に読んでもらっている中で「俳句のようにお題を設けたら?」「連詩を考えてみては?」などのアドバイスを受け、もう少し成長して楽しみ方のレベルを上げてみようかという気になりました。

でも元々は「詩・あそび」であるし、遊ぶなら徹底して遊びたいと、しりとり詩を思いつきました。今のところ、どんなことになるのか予想もつきませんが小さなボウケンとして、まずやってみるべえ、ということ

とになりました。

ルールはただ一つ。前の人の詩の最後の一行を自分の詩の第一行目として書き始めるといふものです。

今回の第一走者保坂さんの一行目は、前号「詩・あそび」の最終行から引き継ぎました。

最終行だけがリレーのバトンのようにひき渡されるので、なかみはどんな詩であったのか見ていないわけです。

四人の詩が揃ったところで、初めてのお披露目となります。その時の感嘆、驚き、意外性などを想像すると今から胸が躍ります。

(二月二十五日)

輝くひと 山形一至

雪を詩に乗せながら

輝くひとと歩いた

淡い雪のように 溶けていく言葉

記憶は 胸に留めてくれた

雪のように 白い言葉は

そのひとの頬に張りついて

輝いた

雪を払いながら 私は想念を落とす

白い布を纏って行くひとよ

輝くのは 君の意識が昂るときなのか
仰ぎ見ていたのは 幻か 残像か

雪は 想念の空から降り注ぐ

あらゆる力で 放たれてやってくる雪
数日で また雪は積もった

理知的な空気に包まれていた

輝くひとよ

少しだけ同じ空気を吸って 守り合った
輝くひとよ

いまは後ろ姿だけ残ったまま

雪を踏むと そこだけ音を立てて崩れた

失せ物探し 保坂 英世

雪を踏むと そこだけ音を立てて崩れた
どこかに違和感があったのだ
それが何かを知らぬまま
歩きつづけてきた

ふたりは川に沿って歩く
雪は 風に乗って落ちてくる
落ちては すこし舞い上がる

あのととき

あのひとが仰ぎ見ていたのは何だったのか
私の見ていたものは何だったのか

崩れた雪を見たとき
そこにはつきりと破局が見えた
勧められたままに買ったネクタイのように

いつもより早い今年最初の雪
数日雪は降り続き 視界を白く変えた
こころの準備もないままに
引きずりこまれる冬

まだ 失せ物探しをしている
窓の外
こやみなく雪が降っている

待春の窓 吉田 慶子

こやみなく雪が降っている

降るスな
降るもんだスな
積もるスべが
積もるスべな

雪降る日の挨拶は

来る日も来る日も繰り返される

白くとざされた季節は人恋しくなる
ひと晩かけて語ってみたくなる

ああだったねえ こうだったねえ
ほんとうは すきだったんだよ

どつきりさせながら横顔を見せて
その続きを つぶやいてみたい

この雪が止んだら と
けいたいを引き寄せる

たとえ
けいたいポタンに私の指が届かなくても
やわい陽光がめぐって来るだろう
約束されたように

冬そらび ぼうずみ 愛

約束されたように

深紅のばら七本買ってきて

花びんは マジヨリカ

画材の台におき ながめていました

カタカタ カタツと風の音ともまがう

まかふしぎな現象に目をみはる

画家は死して自由をえたのでしょうか

あちらからこちらへ出たり入ったり

描き残した絵を見に やってくるのか…

未完の絵を窓枠にならべ

カーテンを取りはらい

寒気にさらしていると

絵はだが耀くことに気がついた

高価えのぐ葉の力が画面におしはかり

目にあふれた

そうだった と積荷の紐をほどき
絵を画家の写真の前においた

これからは

〈もうろう体で描く〉と云っていたが
歯ぎしりして逝ったのでしよう

いま わたしは未完の薔薇の絵に
冬薔薇そうびと名づけましょう
渾身の愛をこめて

渾身の愛 山形 一至

渾身の愛をこめて

この刺激的な言葉は 化石になっている
知性を欠いて 海底に沈んでいる
ひとは愛によって裁かれる

何年前のことだろうか

こんな言葉は知らなかったが

ひそかに胎動するものがあつた

大人になって分かつたことだが

それでも定かなものではなかつた

少女に抱いた感情は それに近かつた

肉体はまだ青かつたのに

どこかに早熟の兆しがあつた

だから毎日のように

少女の家の前を 用もないのに通り過ぎた

少年に渾身の愛があつたのか

70年も前の話を引き出そうとしている

ここは過去形で処理するしかない

過去の出来事は沢山ある

飛沫を浴びて 彷徨する時代

いまさら恥をさらすこともあるまい

静かに 静かに瞑想すると

いまでも私の前に現れるひとたちがいる



.....
あとがき

誕生日の翌日、大仙市強首の雄物川べりに建つ稲村容作の詩碑をたずね、詩碑の前で（私は八十八年生きて来られたのは、此の様な、詩碑のお蔭です）と黙想し、碑面に刻まれた碑文を朗読すると、昭和初期の芸術運動は文化運動であると行動した稲村容作に重なる私の父の運動の姿を見ながらあります。今から数十年前に訪れた時より尚一層の感慨が沸きました。

湊詩人クラブに参加し「詩あそび」のみようもくの中で私の詩は暗く精神的苦痛のもとになっては……と考えること屢々でした。而して誕生日を終えた私は不思議と元気になり、房住山に出掛けて農民運動に倒れ山に眠る父に、「ありがとう」の声を届けてきました。
(ぼうずみ愛)

夕方に電話が鳴った。出ると「今、湊詩人クラブのメンバーが集まっているから来い」とのことだった。

いわれた居酒屋にかけつけると、山形、今川、ぼうずみ、吉田の各氏がテーブルをまっさらにして私を待っていた。どうも山形・吉田両氏がお互い事前に連絡したと思っていて、あわてて電話がきたというのが真相らしい。各自持参の自作詩を朗読。私は当然持ち合わせがなかったが、ちょうど何日か前に出来上がった「椅子」という詩があつたので、原稿なしで読んだら、えらく今川さんに感心された記憶がある。これが湊詩人クラブに入りたいきさつであり、「詩あそび」の始まりでもあつた。

(保坂英世)

「詩あそび」の仲間は、当初5人であつた。今川洋さんを失って今は4人の会。

人間、欠点を持ちながらの付き合いだが、至つて会の雰囲気はよい。想像の回路は、楽しい方向へと導いてくれている。詩のなかに癒しや遊び心もいれて、くつろぎの時間にしたいの思いで、「湊詩人クラブ」がスタートした。ここに小詩集としてまとめることができたことはうれしいことだ。

詩を書く人間は、多少病んでいゝ、といえなくもな

い。だから詩を書いて癒され、また新しい病(想念)をつくつて少し安堵する。その繰り返しもアイデアの時代で、そこに発見や想像が加わると楽しくなる。

(山形一至)

遊び盛りをはるかに超えてしまった年代のいい歳をした大人達が数人で遊びながら始めた「詩・あそび」であつたが、道を踏みはずす火遊びにもならず10号が迎えられた。遊びだからと、ふざけ半分にあつさりという訳にもいかないもので、詩人はいかなる場合も真面目なのである。短いものであつても身近なテーマであつても全力投球したあとがはっきりと読んでもれる。だから、これまでの作品を集めたこの小冊子は小さくても真剣さと個性的な表現に満ちあふれているように思えるのはテーマエミソだろうか。

願わくばもつと多くの人と色々な詩遊びをしてみたい。詩を書く人書かない人を問わずに。

(吉田慶子)